

脇能の二三に就いて

法政大學教授
文學士

阪 元 三 郎

脇能は普通に神物と云つて、凡そ能柄を神・男・女・狂・鬼の五つに別ける其の種別のやうに考へられ易いが、さう考へるのは誤であつて、一日に演奏するプログラムの順序と解するのが當つてゐるやうである。能は少しく嚴密に分類するならば二十五六種にも別けられるが、併し演奏する場合には、最初か、中か、終か。假に之を芝居で云へば、幕數としての何幕目に當るか、略ぼ其の位置を定めることが出来る。そこで概括的に大別すると、第一番に演ずるものが神能で、次は二番目物、其の他は雜の物と觀るのが先づ穩當であらう。こゝに脇能と云ふのは即ち、其の第一番に演ずる神能の事である。乍併何故に神能を脇能と呼ぶのかと云ふと、まだ確な説は定まつてゐない。大抵の能ではシテが最も活躍する中心の役者で、其の餘は所謂「取巻き」であるが、其のシテの相手をする役がワキである。野上氏は曾て

ワキの役柄を評して、ワキは舞臺でシテの話を聴く役であるから聴き手の總代であると云つたが、これは實に面白い觀察である。斯く聴き手として、シテの昔話を引出すのがワキの役で、謂はゞ進行係が大部分であるから、普通はワキが舞臺で活躍する事は少いのであるが、神能では可なりそれが仰々しい發揚の仕方をする。即ちワキ役が第一番に舞臺へ出て、アクチーブな所作を見せる。あれは恐らく、昔宮中で行はれた拜舞の禮、即ち立つて左右左、居て左右左云々と云ふ最敬禮の古式の通俗化したものかと思ふが、兎に角ワキが斯かる發揚の仕方をするのは神能に限つた事である。そこで、神能の脇は中々重い役で、未熟では勤まらない。神能を脇能と稱するのは其の爲であると、普通には解せられてゐるが、しかし、神能以外にも脇が劇的に重い役をするものが相當にある。例へば谷行・檀風・張良・藍染川・調伏會我などでは、ワキが重い役で、寧ろシテ以上にむつかしいのである。故に役柄の輕重で説明するのは適當でない。理由は、もつと外になければ成らぬ。

とすると、脇能といふ語の起源はどう考へたらよいか。これは甚だ困難な問題であるが、私が曾て偶然に考へついたのは、何處の演能でも一番最初に行る翁式三番の事を、其道の人たちは「頭取」と呼ぶ事である。此の頭取といふ語の適用範圍は甚だ曖昧であつて、翁の曲全體を指しても呼び、又、舞臺へ出る三番叟の役者、鼓打、笛師などにも頭取を命ずると云ふのであるが、兎に角翁が頭取で、其の相手

をするものが脇である。そこで、能樂が盛に作られた當時は、恰も亦、連歌の流行時代であつた事に想到して、連歌俳諧の方の術語として脇句といふ事があるのを聯想し、此の脇句に對して、立句の事を頭取と稱した例があれば、甚だ好都合であると考へて、色々研究して見たが、残念乍らそんな例をまだ發見することが出来ないで、單なる空想に了つてゐる。そんなわけで、何故に神能を脇能と呼ぶかの理由は判明しない。随つて今の處では只、脇能は最初に演ぜられる能で、神靈・神體を中心主體とする能を云ふと解して置く外はない。

二

脇能には色々の種類がある。其れ等の細微な差違點は一々擧げ盡せないが、二三の例を云ふと、高砂(を代表型とする高砂型(養老・弓八幡等が之に屬する)。後ジテが年老いた上品な神の姿として現れる老松型、即ち白髭・大社・道明寺の類。又、難波のやうな恐ろしい惡尉の面を被つて出る一種の型。それから、嵐山とか賀茂とか云ふやうな豪放で變化のある型。竹生島・和布刈のやうな龍神がシテで出る型。氷室・逆矛のやうな小癩見の面を被つて出て働を見せる型と云ふ風に、甚だ多くの區別が見られるのである。ところが斯く多種類に別れてはゐても、神能たる脇能には、凡てに一貫する共通の本質がある。それは、敬神尊王の思想が全體の中心を成してゐる事である。即ち、天下泰平を祝福し、皇室の繁榮を

祈る意味が明かに詞句の上にも現れてゐる。斯ういふものを特に演能の最初に出すのは、古來日本人の間にある言靈信仰、即ち目出度い事を言へば幸福が到來し、不祥な事を口にすれば禍が來るとする考から生れたものかと思ふが、兎に角藤能には此の主義が一貫して披瀝され、そして又、他の能とは異つて、劇的の組織を成してゐないのが特色である。

扱次には作者の問題であるが、現に流傳されてゐる能の多くは、應永頃から嘉吉頃にかけて作られたものらしく、それ以後の新作はあつても、模倣的で藝術價值が低い。大體に於て最も優れた標本的な作は、觀世の二代世阿彌のものであらう。現に各流の能役者が傳へてゐる曲は、二百三十五曲であるが、その半數は世阿彌の作で、外には金春・禪竹等二三の名が算へられるだけである。應永と云ふと、南北朝の統一が漸く成つて、足利將軍義滿が、勢に任せて我威を振ひ、恐れ乍ら皇室は式微の状態にあらせられた時代であるが、そんな時代の産物であるにも拘らず、此の能樂が皇室中心主義の思想を盛に鼓吹してゐるのは注意すべき事實である。有名な伽草子は、同じく室町時代の所産であるが、その中には一種の不都合な記述が幾つも出てゐる。例へば文正草子には、鹿島大宮司の雜色文太と云ふ者の娘が時の帝の後となつて皇子を産んだ話が出て居り、その他にもなほ同様の話が見られる。これは恐らく源氏物語などの影響かと想はれるが、兎に角當時の無學な下賤者の間では、帝室尊崇の念が餘程薄らいでゐた

やうである。然るに其の下賤な身分から出た能作者たち、而も足利氏の援引で、社會的位置を得た能作者たちが、能樂を作曲するに當つては、常に帝室尊崇の精神を現し、反對に將軍政治に對しては、殆ど片言隻句も謳歌の聲を放つてゐない。これは眞に不思議な程の事實である。これが連歌俳諧師などならば、寧ろ輕薄に思はれる位に、頼うだ檀那には祝福の詞を詠み掛けるのが普通であるが、能作者に限つて、それが微塵もなく、脇能は勿論、二番目物・三番目物・雜能物にまでも、敬神尊王の精神が屢々現れてゐるのである。此の傾向は世阿彌に於て最顯著であるが、其他の作家にも同じく強く現れてゐる。又元來日本文化は多く大陸の影響を受けて發達したもので、殊に大和時代は模倣時代を成し、中には藤原清河、安倍仲麿の如き、一部の外國崇拜者をさへ出したが、平安朝以來、漸く日本意識に目覺めると共に、外來文化を其のまゝ鵜呑みに攝取せず、十分に消化して日本的なものとした後に吸收する風を生じ、徒らに外國を崇拜謳歌しないやうに成つたばかりか、寧ろ強く外來の壓力を排除せんとするに至つた。能が初めて作られたのは、足利義滿の時代かと思はれるが、此の義滿は事大主義の男で、隣邦明に對しては、常に敬意を拂ひ續けたと云ふよりも、寧ろ之を恐れ、之を重大視してゐた觀があるのに反して當時の國民中の氣概ある者は、其身を扁舟に托して荒海を乗切り、明の邊海地方を侵して、各所に所謂八幡船の威を示した。故に明から云へば、義滿が明を恐れ重んじた以上に、日本人を恐れ、日本を重

大視してゐたに相違ないのである。此の事實に據つて見ても、如何に當時の日本人民が熱烈なる國家的自主精神に燃えてゐたか知られるのであるが、此の精神は又、敬神尊王の傳統的精神と共に、甚だ強く世阿彌等の作に現れてゐるのである。

試みに能の中から、大陸國の威勢を恐れぬ日本主義思想の強く現れてゐる諸作を拾ひ上げて見ると、白樂天・春日龍神・善界・絃上等が第一に算へられる。前の二曲は共に世阿彌の作である。善界は、喜多寶生では是界、金剛流では是我意と三字に書く。これは金春系の竹禪法印、又は金剛彌五郎の作であらうと云はれてゐる。是等の三曲中で、本來的な脇能は白樂天だけで、後の二つは五番中の最後のもの即ち切物であるが、而も不思議に皆、脇能と成り得る性質を持つてゐる。極簡單に筋を云ふと、逆に先づ絃上は、琵琶の名手たることに慢心した太政大臣師長が、更に極意を極めんが爲に入唐を志し、須磨の浦まで行くと、村上天皇と桐壺の女御との御靈が、假に鹽焼の老夫婦と成つて現れ、師長を引留めて妙樂を奏されたので、師長も初めて慢心の夢覺め、世には自分以上の名人あることを知つて逃げ歸らうとするのを、天皇は本相を現して御物の琵琶を師長に賜ひ、茲に師長は入唐の志を絶つて歸洛すると云ふのが荒筋で、これは支那を優越的な國と考へた從來の謬想を完全に打破したものである。

次に善界は、支那の天狗の首領たる善界坊が、佛法の流布を妨げる目的で、日本に渡來し、愛宕山の

太郎坊と力を合せて、先づ比叡山から荒し初めようとすると、山王權現を初め、男山・松尾・北野・賀茂等の神々が現れて、山風神風を吹かせ給ひ、善界坊等を懲らしめられたので、今より後は来るまじと誓つて逃げ歸るといふ筋で、これも自主精神の強い現れである。

次に春日龍神の筋も絃上によく似たもので、梅尾の明惠上人が入唐渡天の望を抱き、道すがら御暇乞のため春日社に參ると、神は宮奴と現れて、神國日本を去つて渡天の必要なき事を諭し、三笠の山に佛國土の有様を現し示して、遂に入唐を思ひ止らせるといふ處で終つてゐる。即ちこれ亦、日本が決して大陸諸國に劣らぬ立派な文化國であることを根本の考としたものに外ならない。

最後の白樂天も面白い作である。これは支那の天才詩人たる白樂天が、日本の智慧を計りに出て來たのを、住吉神が知つて、一漁翁と成つて松浦瀉に出迎へ、海上で詩歌の才を闘はして妙技を示されたので、さすがの樂天も、日本人の智慧の量り難き事を覺り、其のまゝ引返すと云ふ筋で、只讀んだいけでも實に痛快極まるものである。ところが、此の白樂天が住吉大明神の爲に追拂はれるといふ構想が何處から出て來たのかと云ふと、之について思ひ當るのは應永二十六年に、韃靼から日本を攻めに來たと云ふ事件である。つまり弘安の役後に再び我が國が外寇を受けたのであつて、此の時も對馬あたりは相當に荒されたらしい。しかし比較的無事に敵を追拂ふ事が出來たので、それを祝福するつもりで、殊更に

文學的な事件として扱つて、世阿彌が此の作をしたのであらう。此の事件に就ては久米邦武博士から聽いた話にヒントを得て、兩方を結びつけた意見を會て或る雜誌に發表した事があるが、當時の敵軍襲來の狀況、京都の騷擾等の記述は、只後崇光院の『看聞御記』に出てゐるだけで、其の他には史料が少いと聞いてゐる。御記に従ふと、五月二十三日の條には、韃靼襲來の情報を高麗國から傳へて來た事があり、六月二十五日の條には、出雲大社が震動して血を流したとか、西宮の荒戎の宮も震動したとか、廣田の社から女の騎馬武者を大將とする神軍が出て馳驅の狀を成したとか云ふ類の神異の記述が出てゐる外、七月にも同様の事が記され、更に八月十三日の條には九州探題の注進狀を載せて、六月二十日以後の戰況を具に現し、我が軍の側には神軍が現れて、大將と思しき女人、其の力計るべからざる一人が、敵を手取にして海中に投げ入れ了り、遂に萬事落居した、併しながら、これは神明の御恩であると思ふやうな報告の全文が掲げ出されてゐる。なほ其のあとを見ると、宮廷方面からも、幕府方面からも、八幡宮參詣とか、放生會の開催とか、報賽の祭事、又は國家安泰の祈が頻に繰返されてゐる。恐らく世阿彌の書いた白樂天は、此の事件を題材にして、國家の祝福のために作られたものであると思ふ。

三

其の次には、全く異つた方面を扱つたものとして、弓八幡を紹介したい。これは一見甚だ不思議な曲

名であるが、能では屢々此の種の曲名の附け方が行はれてゐる。つまり弓八幡とは、八幡神に關する能の中での區別的な稱呼であつて、此の能を演ずる時には、弓が持出されるから、特に斯く呼んだのである。賀茂の中にも、昔は葛城賀茂と矢立賀茂とがあつたが、矢立賀茂とは其の演能に際して、舞臺に矢立が出されるからの名である。(今では葛城賀茂を代主と呼ぶやうに成つたので、此の區別的稱呼は自然に廢された) 其の外、短冊忠度とか小袖曾我とか云ふのも皆、同名の曲が並ぶ時の區別のために附けた名の例である。

此の弓八幡は、高砂と共に眞の脇能と云はれてゐるもので、内容は簡單であるが、如何にも脇能らしい特性を具へてゐる。筋を云ふと、後宇多院に仕へ奉る臣下が、男山八幡の二月初卯の祭に參詣して一人の老翁に逢つた。すると其の老人は、錦の袋に入れて持つてゐた弓を差出して、之をあなたから、最早干戈を動かす必要がなくなつた泰平の御代の表章として皇室へ献上して貰ひたいと委託し、曾て弓矢を以て天下を治めた神代から神功皇后の時代、應神天皇の御治世等久しい間の話をして、自分は末社と祭られてゐる高良神であると名のり、一旦かき消すやうに失せてから、再び神の姿で現れ、神舞を演じて、都から來た廷臣を慰め、天下泰平を祝し、聖壽の萬歳を壽ぎ、八幡の神徳を讃へ奉る所で、終るのである。此の能の特徴は、大抵の能には文句に附いた所作が伴ふのに反して、さうした所作がなく、舞

の手だけで演ずる所にある。これも前に述べた世阿彌の作であるが、世阿彌の著した『申樂談義』に能の書き様を記してゐるのを見ると、其の中に、

「能の新作の本は、三道に精しくあり。先、祝言のかゝり、すぐなる道より書き習ふべし。すぐなる體は、弓八幡なり」

と、之を標本に推して、

「曲もなく、眞直なる能なり。當御代の初の爲に書きたる能なれば、祕事もなし」

と書いてゐる。茲に「當御代の初」とあるのを、吉田東伍博士は、足利義教が六代の將軍に成つた時と解し、其の後曾禰平太郎氏の大觀にも略ぼ同じ様な事が書かれてゐるが、私は之を將軍の事と見ないで、後花園天皇御即位の初の意味に解したい。尤もこれは偶然であらうが、天皇の御即位も、將軍の襲職も年代に於ては同じである。即ち、稱光天皇が崩御成つて後花園天皇の御踐祚があつたのも、義持が薨じて、義教が家督を繼いだのも、共に正長元年である。又、御即位式が永享元年であるのに對して、將軍宣下も同年である。で、何れにしても年代の上では争ひ榮えがないわけであるが、「當御代の初」とある以上、天子御即位の年でなければ成らぬ。吉田博士は、之をゴダイと讀んで、將軍の事と解されたのであるが、私はゴダイでなくてミヨであると思ふ。何となれば、高良神が老人と現れて歌ふ詞に「君が代

は千代に八千代にさゞれ石の、いはほとなりて昔のむす」と云ひ、又、「月の桂の男山、げにもさやけき影に來て、君萬歳と祈るなる」とか、「是は當社に年久しく仕へ申し、君安全と祈り申す者なり」、「更け行く月の夜神樂を、奏して君を祈らん云々」或は「君を守りの御惠、本より定めある上に、殊に此君の神徳、天下一統と守るなり」とある。是等の文句に現れてゐる「君」とは、どうしても皆帝の事でなければ意味を成さない事ばかりだからである。

ところが茲に一つ問題に成るのは、ワキの詞に明白に「是は後宇多の院に仕へ奉る臣下なり」とある事である。一體脇能に出る脇役は、多くの場合、只漠然と「當今に仕へ奉る臣下なり」と云ふのが普通で、何時の事か判然とわからないのが原則である。又、神主にしても、「何々明神の神主なり」とのみあつて、姓名又は時を明示しないのが通則で、高砂だけが殆ど唯一の例外である。然るに此の弓八幡では、明白に後宇多院云々と名のつてゐる。これは頗る不思議な事で、後宇多院と申せば、鎌倉時代の天皇に在しますが、此の御代に起つた最も重要な出來事は、誰も知つてゐる蒙古の襲來である。その元寇當時の天皇の御名を特に世阿彌が、こゝへ引出して來たのは、餘程意味のある事でなければ成らぬ。弓八幡が出來たと想像せられる永享元年は、前に引いた應永二十六年の韃靼襲來から十年の後に當るが、十年と云へば、まだ當時の記憶の鮮明な時分であるから、其の様な事變が再び繰返されて困るとは、凡

ての人の考へてゐた事に相違ない。そこで世阿彌は、此の應永末の不安な氣持がまだ鎮靜しない頃に當つて、弘安の華やかな大勝利を想ひ浮べ、それにあやかるやうに、特に弘安當年の事として此の曲を作り、なほ當時赫々たる神驗を示された八幡神參詣の一條を持つて來たものと思ふ。その上又、國內的に見て正長・永享の頃は、南北朝の統一後相當年數を經てはゐるが、楠・北畠の一族は、屢々諸所に出沒して小さな亂を起し、河内・大和・伊勢等の地方は、まだ眞の安寧を得ず、南朝系の宮様方もまだチラチラ残つてゐいでに成つたから、人心は猶不安定で、それが長い間の戰亂に倦んでゐる上下の人々をして、新帝御即位の御代の始に當つて、之を機會に、完全な天下統一が行はれ、眞の太平を祝し得ると同時に、外患のないやうにありたいと云ふ希望を燃え立たせたらうとは、當然考へられる所である。即ち世阿彌は、斯かる社會事情の上に立ち、斯かる希望を持つて、四海波靜に、海山治まる太平の御代を祝福して、此の弓八幡の曲を作つたものと私は考へるのである。

斯う考へて來ると、ワキの道行に、「四つの海、波しづかなる時なれや、波しづかなる時なれや、八洲の雲もをさまりて、げに九重の道すがら云々」とうたはせてゐるのは、何でもない事のやうであるが、まだ不安の消えきらないあびえた胸を抱いて太平を願つてゐる心持がよく出てゐると思はれる。又、シテ役が後ジテで神の姿を現した時に、「殊に此の君の神徳、天下一統と祈るなり」と述べる一句は、此の

曲だけにあるもので、之を見ても當時はまだ完全に天下統一の出来てゐなかつた事が考へられ、殊に此の新帝のお目出度い御即位を機として、太平の望が達せられるやうにと祈つてゐる痛切な感じが酌み取られるやうである。故に、作者の世阿彌も、別に「祕事もなし」と云ひ、一般の人たちも、今までは、此の曲について劇的な味があるとも寓意が潜んでゐるとも考へず、只目出度い事づくめを列べた曲と見て來たやうであるが、文句を仔細に注意して見ると、前示のやうな心持が確に盛られてゐると私には考へられるのである。

能の研究、又は謡曲の研究は、演技的方面から、或は純文學的方面から、色々手が着けられてゐるが、或る作と、その背景たる時代相、或は思想的潮流とを、可なり密接に結びつけて考へる研究の仕方亦、相當の價值を持ちせぬかと考へて、其の方面から聊か弓八幡の曲について管見を述べ、諸君の高教を待つ次第である。

迎 新 年

新 津 澹 如

元旦の雪踏みしめて諏訪山へ
餅の匂ひ正月は一家平和なり

非常時の新年

久世爲次郎

○ 非常時も天つ日の子が出でまして

躍進時とぞ名をかへにける

坪谷水哉

○ 浪高き太平洋の初日かな

伊勢海老の鎧勇まし床飾り